

## 『不思議の国のアリス』：150年色褪せない本 その現状と魅力

著者	楠本 君恵
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	84
号	3
ページ	67-97
発行年	2017-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/13020">http://hdl.handle.net/10114/13020</a>

# 『不思議の国のアリス』

—150年色褪せない本 その現状と魅力—

楠 本 君 恵



写真：(a) アリス・リデル

『不思議の国のアリス』には作品のモデルになった実在の少女アリスがいる。アリスが8歳の時のこの写真は、1860年7月、まだ誕生して間もない大がかりな装置を駆使して、アマチュア写真家の走りだった作者キャロルが撮影したものである。

この少女を主人公にした子供の本が、世界で最も多くの言語に翻訳され、映画や舞台芸術に取り上げられ、出版以来150年経った今も、なお色褪せない魅力を持ち続け、人々を引き付けている。

## はじめに

ルイス・キャロル(Lewis Carroll), 本名チャールズ・ラトウィッジ・ドッドソン (Charles Lutwidge Dodgson 1832-1898) の『不思議の国のアリス』

ス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, Macmillan, 1865) が出版されてから150年目の2015年は、日本ではさほど盛り上がりなかったが、英国や米国では『アリス』<sup>1)</sup> 及び『アリス』関連の本の出版やさまざまなイベントで沸き返っていた。前例のない規模の研究大会がイギリスでは2015年9月にケンブリッジのHomerton College で、アメリカでは同年10月にNew York University, New York Institute of Technology など市内の複数の会場で行われた。昨年2016年がシェイクスピアの没後400年だというように、生誕何(百)年、没後何(百)年とかの記念の年に、その著者を偲ぶことはしばしばあるが、ある一冊の本の出版を記念してというのは珍しいことだろう。この稿ではこのような影響力のある児童書『不思議の国のアリス』の現状、成立過程、作品を取り巻く諸条件、人気の秘密などについて考えてみたい。

## 『不思議の国のアリス』の現状

### A. 翻訳大全の出版

北米ルイス・キャロル協会では、5年も前から準備を進め、世界的視野で『アリス』を見ることをテーマにした2015年の大会の趣旨に合わせて、大会直前の8月に現時点での『アリス』の翻訳に関する文献としてはこれ以上望めないと思われる大著を出版した。『ワンダーランドの世界のアリス—ルイス・キャロルの傑作の翻訳総覧』*'Alice' In a World of Wonderlands — The Translations of Lewis Carroll's Masterpiece*<sup>2)</sup> がそれである。二人のエディター (general editor として Jon Lindseth 氏、技術面一切を担当する technical editor として Alan Tannenbaum 氏) の監修のもと、北米ルイス・キャロル協会の力を総結集して上梓された。

第1巻 (全837ページ) は、論文集で、各国の『アリス』の翻訳状況、翻

訳事情、及びデーターが載っている。第2巻（全1,011ページ）は、‘Back - Translations’で、世界の翻訳された言語を英語に訳し戻（back-translate）したものだった。言葉遊びが多く、翻訳者が最も苦勞するが、その独自性が発揮できる7章の‘A Mad-Tea Party’の章の各国語の戻し翻訳が載っている。第3巻（全787ページ）は、Checklistsで、世界各国で出版された翻訳、抄訳、部分訳の出版目録総覧である。アルファベットばかりでなく漢字、ひらがな、ハングルやアラビア語系の文字などが混じる編集に、気の遠くなるような労力を要しただろうと推測できる本である。総計2,635ページのこの3巻本は、『不思議の国のアリス』の翻訳研究のパイオニア的役割を果たした、『多言語のアリス―「不思議の国のアリス」の翻訳』（*Alice in Many Tongues: The Translations of “Alice in Wonderland”*, 1964）<sup>3)</sup>の著者 ウォレン・ウィーヴァー（Warren Weaver 1894–1978）氏に献呈されている。

かつてさまざまな日本語の翻訳を集めて漠然と比較検討していた私に、論理的に検討する筋道を示し、私の背を押して『翻訳の国のアリス』<sup>4)</sup>を書かせてくれたのはウィーヴァー氏のこの本との出会いだった。

『ワンダーランドの世界のアリス』の編者たちには、少なくとも出版150年を記念するこの年までに世界で出版されている『アリス』の本は、もれなく載せておこうという強い信念があった。それを断言できるのは、「日本にはアイヌ語という言葉がある。アイヌ語に翻訳された『アリス』があるかどうか調べてほしい」という依頼のメールが入ったからだ。アイヌ語の『アリス』があるかどうか調べてほしい！私の方がびっくりしてあわててしまった。即座に「ノー」と答えて、間違いないだろうという確信はあったが、しかるべき数箇所に当たって返信した。それだけ綿密にアンテナを張ったということである。スペイン語には、6種類の派生語の翻訳があり、方言の違いがどのくらいのものかわからないが、スコットランド語の方言で書かれた10種類のものも記録された。<sup>5)</sup>

## B. Back-translation

各言語の翻訳書から英語に戻す作業が、その言語を母語とするキャロル研究者を中心におこなわれた。日本語の Back-translation は私がお引き受けすることになった。マクミラン版の原書の7章「狂ったお茶会」の103ページからアリスがテーブルを離れるまでの日本語の訳文を英語に戻す作業である。私は、1910（明治43）年に内外出版協会から出版された日本に於ける最初の完訳本である丸山英観訳の『愛ちゃんの夢物語』と、2006年、論創社から出版された拙訳の『不思議の国のアリス』を使って、ほぼ100年の隔たりのある初期の訳書と最近のものを比較した。丸山氏のものは、抄訳の多かった当時で、唯一の完訳だったので、時代による翻訳の変化を比較するためには他のものを選んだ方が良かったかもしれないが、それにもかかわらず、この100年間の西洋文化受容による日本国内での生活の変化はあまりに大きかったので、私のつけた注釈は異文化を訳書にどう移すかということで、講演者にも引用され話題になった。

世界中の言語になって世界中の子供たちに読まれている『不思議の国のアリス』だが、英語圏の人達は、キャロルの英語独特のあの難解で軽妙な言葉遊びが他言語にどう訳されているか、あのパロディの面白さが他言語にどう移し替えられているか、つまり、果たしてあの作品が正しく理解されているかどうか知りたくてたまらないのだ。丸山英観のような博識な人でも、世の常識・風潮に支配されてしまいキャロルの英語の面白さを伝えられないことがあったのだ。例として、戻し翻訳した章から原書の以下の箇所を上げてみたい。

‘Take some more tea,’ the March Hare said to Alice, very earnestly.

‘I’ve had nothing yet,’ Alice replied in an offended tone, ‘so I can’t take more.’

‘You mean you can’t take *less*,’ said the Hatter: ‘it’s very easy to take

*more than nothing.*<sup>6)</sup>

「もっと（more）お飲みなさい」と三月ウサギはアリスにしきりにお茶をすすめた。

「まだ何にも飲んでいないのに、もっと（more）は飲めないでしょう？」とアリスは怒って言った。

「もっと少し（less）は飲めないって意味だろう？無よりもっと（more）飲むのは易しいことさ」と帽子屋は言い返した。

面白い言葉遊びのところだが、丸山氏は以下のように訳している。

『もつとお茶を呉れ』と三月兎が切に愛ちゃんに願ひました。

『もう些とも無いわ』と愛ちゃんは焦心ッたさうに答へて、『そんなに私、進上られなくッてよ』

『ナニ、少とばかりは進上られないッて』と帽子屋が云つて、『何にも無いのを呉れるのは難しいけど、澤山有るのを呉れるのは容易なことだ』

『大きなお世話よ』と愛ちゃんが云ひました。<sup>7)</sup>

帽子屋は、アリスに勧めるのではなく「お茶をくれ」と要求し、「何にも無いのをくれと言うのではない。たくさんあるのをくれるのは簡単だろう」となって、出し惜しんでいるかどうかの問題にすり替わっている。more と less の面白さが完全に消えているばかりか、飲食の場では、女性は男性の給仕役だった時代の文化の反映である。背景の文化が訳に影響を与えた例である。

西洋文化の浸透した現在でも、「Mで始まるものをなんでも描いた。much of a muchness を描いたものを見たことがあるか」という箇所では、ほぼ日本語でこの部分を訳した翻訳の数だけある much of a muchness を戻し翻訳したら、英語を母語とする人たちには、ウィーヴァー氏が言っていたよ

うに、やはり英語から日本語への翻訳は、「かなりいい加減な不明確な仕事だ」<sup>8)</sup>とされていてしまっただろう。

### C. 翻訳に関するデータ

#### 出版数

この第3巻のチェックリストにはAfrikaansから始まって、世界の『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865), 『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, 1872)の出版の一覧が載っている。日本語は出版部数に於いてどちらも世界一で、二位のスペイン語と共にダントツに多い。しかし、スペイン語は本国以外に、メキシコのような巨大な人口を有する国を始め、中南米の諸国で使われていることを考えると、この日本語の数字は驚異的である。出版部数には、edition (初版), reprint (再版), adaptation (抄訳・翻案・部分訳)すべてが含まれる。ルイス・キャロル協会員で、日本の世界に誇るコレクターである門馬義幸氏が調べ上げた47ページに及ぶ日本語の二つの『アリス』の目録は圧巻である。

以下に上位10位までの言語と出版数を上げておく。<sup>9)</sup> (2013年現在)

『不思議の国のアリス』		『鏡の国のアリス』	
Japanese	1,271	Japanese	321
Spanish	1,223	Spanish	249
German	562	Italian	118
Chinese	463	Brazilian Portuguese	102
French	451	German	102
Brazilian Portuguese	396	Russian	84
Italian	391	French	56

Korean	278	Dutch	33
Dutch	243	Romanian	27
Russian	219	Bulgarian	23

### 初版出版年

次に最初に翻訳された年を見てみたい。『不思議の国のアリス』では、日本は13番目に入っている。英語版の出版から4年後の1869年に出たドイツ語版、フランス語版は、英国での人気を見たキャロルの発案で英国で作られ、原書を出版したマクミラン社から出版された。しかし、売れ行きは思わしくなく再版もないままに終わった。マクミラン社では当初の予定を変え、イタリア語などそれ以外の言語には訳されないことになった。だが、英国から売り出さなくてもたちまちヨーロッパの言語に訳されて広まったことが分かる。89年のshorthand（速記法）で書かれたものまでがキャロルの存命中の出版だった。

以下に上位10位までの言語と初版の出版年を上げておく。<sup>10)</sup>

『不思議の国のアリス』		『鏡の国のアリス』	
German	1869	Japanese	1899
French	1869	Swedish	1899
Swedish	1870	Italian	1913
Italian	1872	Braille	1923
Danish	1875	German	1923
Dutch	1875	Russian	1924
Russian	1879	Chinese	1929
Shorthand	1889	French	1930
Czech	1902	Czech	1931
Norwegian	1903	Brazilian Portugese	1933



『不思議の国のアリス』の日本語の最初の翻訳は1908（明治41）年、須磨子の筆名で永代静雄によって雑誌『少女の友』に連載されたもの（通称「アリス物語」、これは7巻目からのタイトルによる）だと言われている。原作のほんの一部を生かした、翻案とも言えないものだったが、アジアの他言語に比べると（cf. 中国語には1922年、韓国語には1960年）格段に早い。もし、完訳のものを待つとしてもあと2年の辛抱で、先に述べた『愛ちゃんの夢物語』が丸山英観によって1910年に内外出版協会から翻訳出版されている。

日本には『鏡の国のアリス』の方が先に導入された。1899（明治32）年、雑誌『少年世界』に載った「鏡世界—西洋お伽噺」がそれである。訳者は長谷川天溪。完全な翻訳ではないが翻案でもなく、非常に面白い。妖怪物語の伝統を引いていて、『アリス』の不思議な国への旅が妖怪の世界に取り込まれてしまっている。

不思議なことだが、この2作目の『アリス』が主なヨーロッパの言語に翻訳されたのは、出版から半世紀近くも経ってからだった。前作の焼き直しと思われたか、あるいはイギリスはまだ文化的に後進国だと思われていたということか。日本語の完全な翻訳は、1930年の楠山正雄訳『アリスの夢 鏡のうら』（平凡社）を待たねばならなかった。

### 日本における再版状況

子供の本に不可欠な挿絵の有無、オリジナルにつけられたジョン・テニエルの挿絵の訳書に占める割合（日本では圧倒的にテニエルのものが多い）とか、ディズニーの影響とか、面白い考察が門馬氏から、世界に向けて発信されている。これだけさまざまな訳が出版されているのに、再版の多いのも二冊の『アリス』の特徴であろう。

同氏の表から版数の多いものとその数（カッコ内）を上げてみよう。<sup>11)</sup>

(2012年現在)

『不思議の国のアリス』

田中俊夫訳，初版1955年，岩波少年文庫（56）

久米稷訳，初版1960年，偕成社文庫（42）

横谷照訳，初版1964年，ポプラ社（52）

生野幸吉訳，初版1971年，福音館書店（46）

福島正美訳，初版1975年，角川文庫（50）

芹生一訳，初版1979年，偕成社文庫（54）

平田昭吾訳，初版1986年，永岡書店（61）＊名作アニメ絵本シリーズ  
『鏡の国のアリス』

岡田忠軒訳，初版1959年，角川文庫（85）

生野幸吉訳，初版1972年，福音館書店（34）

芹生一訳，初版1980年，偕成社文庫（71）

矢川澄子訳，初版1994年，新潮社文庫（22）

20版，30版を数えるものは他にもたくさんある。児童書の出版では，人気があるものは100版を超えるものも珍しくないが，異なった訳書がこれだけある中で，半世紀以上も再版され続けているというのは驚異的なことである。

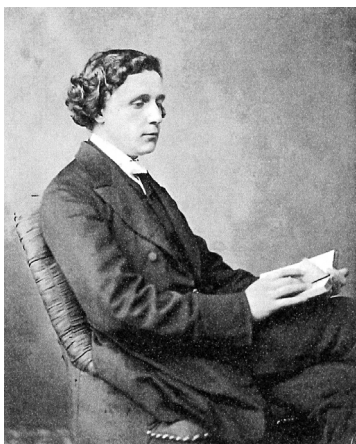
北米ルイス・キャロル協会が中心になって洗い出した，今回のこの『アリス』の翻訳を確認する大事業で，世界174言語に翻訳された『不思議の国のアリス』の実態が明らかになった。（cf. 2016年11月に「番外編」として『ハリーポッター』の第7冊目が日本語で翻訳出版された。その時，79カ言語に翻訳されていると報道されたが，2011年の *The Wall Street Journal* では，67言語に翻訳されていて，バイブルを除いて世界一と書かれていたそう<sup>12)</sup>）

『不思議の国のアリス』に次いで確実な情報は、『アンデルセン童話』で，デンマークの Hans Christian Andersen Museum が159言語の知られてい

る翻訳の内138言語の訳書を保持しているという。<sup>13)</sup>

以上で、『不思議の国のアリス』が世界で最も翻訳され、最も読まれている本だと断言できる十分な根拠になると思うが、同時に『不思議の国のアリス』は、映画に、舞台芸術（芝居、ミュージカル、バレエ、歌 etc.）に、ファッションに、グッズに、絵画・彫刻等々に最も使われて（adapted）いる本である。すでに出版部数で見たように日本はそのトレンドの強力な担い手である。

### 作者ルイス・キャロルと『不思議の国のアリス』の誕生



写真：(b) ルイス・キャロル

出版以来その魅力は失せず、変わらぬ人気を保ち続け、今も子供ばかりでなく大人をも魅了し続ける『アリス』の人気の秘密を探る前に、この本の誕生について簡単に触れておきたい。

1855年、オックスフォード、クライスト・チャーチの前学寮長ゲイスフォード（Thomas Gaisford 1779-1855）の死去により、ロンドンのウエストミンスター校の校長だったヘンリー・リデル（Henry Liddell 1811-98）が、学寮長として家族と共にキャロルのいたク

ライスト・チャーチに着任した。『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』のモデルになった、実在の少女アリス（Alice Pleasance Liddell 1852-1934）はリデル学寮長の次女で、その時3歳だった。キャロルはすでに卒業し、母校の数学講師としてその前年から働き始めていた。「ルイス・キャロル」はペンネームで、学内や、数学の論文には本名ドッドスンを使い、はっきり両者を使い分けていた。ここでは便宜上ルイス・キャロルで統一する。

当時大学は全くの男性社会で、学生も教員も全て男性だった。学寮長のみが妻帯を許され、家族と共に学寮内で生活できた。キャロルの父もクライスト・チャーチの卒業生だが、大学に残ることより聖職に着くことを選び、従妹のフランシス（Frances Jane Lutwidge 1804-1851）と結婚し、キャロル達11人の子供の親になった。キャロルは3番目で、長男だった。当時の習慣で、父親のチャールズという名前を受け継いだ。キャロルが入学した直後、母親は急死している。

英国国教会の牧師の家庭で育ったキャロルは、厳格な宗教教育を父から受け、ラグビー校を経てクライスト・チャーチに入学したが、聖職者にならなかった。大学で優秀だったキャロルは母校に残り数学の教師として、働くことになった。国教会の司祭職の資格を取ることが入学の条件で、それを誓って入学し、Student（特別研究員）の資格をもらいながら、俗人のままで教鞭をとることで話がついて、卒業後も学内にとどまることを許されたのだ。神を信じ、敬虔なキリスト教徒であったが、カソリックも許し、どちらかというところ広教会派であるキャロルは、国教会のRitualism（儀式主義）にはどうしても従えなかったため、自分の信念を曲げるわけにはいかなかったのだろう。それは決して公にはできない理由だから、表向きには、推測になるが、ある組み合わせの音で言葉が詰まる吃音が説教に支障をきたすということを主な理由にしていたと思われる。

キャロルが完全な資格をとらなかったのは、国教会の教えに納得できないところがあって、聖職者になりきれなかったからだと考えると、尊敬する父親の期待と教えを完全に受け入れることができないばかりか、立場上そうしなければならないのに、聖職者の資格を取るのを拒み続けたキャロルの煩悶は、想像できないほど大きかったはずだ。

キャロルは1855年1月から死の間際まで日記を書き続けた。キャロルの死後、近親者の手で、日記の一部が処分された。処分された日記は、そんなキャロルの宗教上の悩みを綴った部分だったのではないかというのが最新の研究の行きついたところだが、話題性を求めるマスコミに煽られ、ア

リスに恋をして知られたくない胸の内が書かれていたからだとか、公に出来ないような少女達との暗い秘密が書かれていたのだとか、いまだに取沙汰されている。そういうことは皆無だと分かっているのに、『不思議の国のアリス』が誕生して150年経った2015年にもまだ、世界の児童文学の古典を生んだ作者のスキャンダルとして、キャロルに異常性愛者のレッテルを貼ろうとする動きがあるのだ。

キャロルは、途中欠けている日はあるが、詳細な日記を書き続けたばかりか膨大な数の手紙も残っていて、その中の多くが公表され、コレクターたちの価値あるアイテムになっている。キャロルの日記や手紙に現れる少女友達は300人を超している。多くはキャロルが積極的に働きかけて交友が始まるのだが、少女との交際はたいてい1、2年、長くても数年で終わっている。だが、中には20年もそれ以上も続き、生まれた子供がまた新たな少女友達になった例もある。キャロルは親しくなった、または親しくなりたいと思う少女たちを招いて写真を撮った。中に少女たちの裸身を撮影したものがあることから（キャロルは撮影前に必ず母親の承諾を得ているし、当の少女が望まない限り絶対に被写体にはしなかったし、できた写真が本人の迷惑にならないように細心の気を配った）、上記のような勘繰りが生じた。キャロルは子供（主に少女）の移ろいゆく妖精のような美しさを留めたいという意図で、こういう写真を撮る自分を *artist* と呼び、できた作品は *study*（習作）と呼んだ。

当時の交友は手紙を通してだったから、たくさんの手紙が残っている。からかい半分にまるで恋人に出すような大げさな表現をした手紙を書いたりしているので、それが上記のような誤解を招くことにもなる。

だが、その欠けた日記に書かれていたのは、キャロルの深い宗教上の悩みをぶちまけた個所だったのではないかと思う。近年、そのことを詳しく論じた本が出た。<sup>14)</sup>

学期中は学寮内で生活する学生や教師たちは、街に出たり、ロンドンに

行ったり、近隣の自然の中で散歩や、ハイキングや、ボート漕ぎなどをして息抜きをした。『不思議の国のアリス』は、キャロルが友人のダックワース (Robinson Duckworth 1834-1911) と学寮長の娘、アリスたち 3 姉妹 (Lorina, Alice, Edith) とテムズ川の支流アイシス川を遡る川遊びに行った時 (1862年 7 月 4 日) に語られた話が元だった。その話を「私のために書いてください」と、アリスに頼まれて、文字に留めたのが原型になった。キャロルはその原稿を、子供たちを通して親しくなり、家族と付き合うようになっていたジョージ・マクドナルド (George MacDonald 1824-1905) の子供たちに読んでもらい、出版を決意した。「こんな本が 6 万冊もあればいい」と言ったジョージ・マクドナルドの息子グレヴィルの言葉に自信を持ち、出版用に約 3 倍近くに膨らませて、『不思議の国のアリス』を世に出した。

キャロルはオリジナルな物語をきれいに清書し、自分でペン画を付け、白いベラム革の表紙で製本させて、ボート遊びから 2 年余り経った 1864 年 11 月 26 日にクリスマスのプレゼントとしてアリスに贈っている。『アリスの地下の冒険』 (*Alice's Adventures in Under Ground*) と名づけられたこの本を手稿本と呼んでいる。キャロルは後年、1886 年に、ハーグリーヴズ夫人となって久しいアリスに借りて、この手稿本を複製出版している。

(キャロルの写真は Asisted self-portrate, 自分で準備し、シャッターだけ切ってもらって撮ったものである。この時のキャロルは 43 歳だった。)

## なぜこれだけ人々を惹きつけるのか

### A. モデルと作者双方の魅力

実在の少女アリス・プレザンス・リデル (Alice Pleasance Liddell) がいつしか、二つの『アリス』の主人公アリスと同一人物のように思われ、美しいアリスの存在が、作品中でのアリスの不思議な体験をよりリアルに思

わせるようになった。クライスト・チャーチで学んだヴィクトリア女王の末子のレオポルド王子とのロマンスが噂された。アリスの母親は Kingfisher とあだ名されるほど、上流志向が強かった。それを察した女王の差金でか、王子が学業半ばでカレッジから呼び戻されたということもあり、アリス自身の運命も人々の関心をそそった。アリスは当時としては決して早くない28歳の時、やはりクライスト・チャーチの学生だった地方の土地持ちの息子、レジナルド・ハーグリーブズ (Reginald Hargreaves 1852-1926) と結婚した。

キャロルのことはその日記ばかりでなく、現存するたくさんの手紙、その交信記録、自身が撮った写真の記録などから、かなり詳細に浮き彫りになっている。強い好奇心と、幅広い交友（かつて言われたようにキャロルは決して人間嫌いの世捨て人ではなかった）、目的のためには手段を選ばぬ積極的な行動力で、当時のヴィクトリア朝のおおぜいの著名人とつながりを持ち、また、おおぜいの美しい少女友達と積極的に交友関係を結び、自分が楽しんだばかりか、当時まだ女性の社会進出が難しかった中で、彼女たちの能力を発揮させてやろうと骨折った。この時代に生きた人として、先見の明のある人道主義者であった。

そればかりか、キャロルの数学・論理学の業績は、その分野の人々の研究対象となっている。

## B. キャロルの実像が明るみに

### ・死を悼む少女たちの反応

キャロルの没後思いがけないブームが起こった。それは1898年、キャロルの死後間もなくだった。キャロルの突然の死が報道された時（キャロルは66歳になる直前、クリスマス休暇に帰省していたギルフォードの姉妹の家で風邪をこじらせて1月14日に急逝した）、新聞社に「私はキャロルの友達だった。素敵な手紙をもらった」と少女たちからの投書が相次いで寄せられた。

キャロルにおおぜいの少女友達がいて、ロンドンのロイヤル・アカデミーと一緒に展覧会を見に行ったり、観劇に同行したり、避暑地のイーストボーンやオックスフォードの公園に散歩に誘ったり、ごく親くなれば自宅にお茶に招いたり、写真撮影に呼んだりしているのは、限られた人たちには知られていたが、この報道によって、全国的に知られることになった。二つの『アリス』の作者として有名になったルイス・キャロルの未知の一面を知った読者はわき立った。その死を悲しむおおぜいの少女友達はこぞって回想記を寄せ、さらにキャロルという一風変わった魅力的な人物が知られることになった。

#### ・甥コリングウッドによる2冊の本の出版

その余韻が覚めない同年の内に、『ルイス・キャロルの生涯と手紙』(*The Life and Letters of Lewis Carroll*, 1898)<sup>15)</sup>、その翌年には、『ルイス・キャロル ピクチャーブック』(*Lewis Carroll Picture Book*, 1899)<sup>16)</sup>が出た。編集をしたのは、妹メアリーの息子で甥のスチュアート・コリングウッド(Stuart Collingwood)だった。ここでキャロルが生涯で培ったびっくりするくらい広い交友関係(アルフレッド・テニソン、ジョン・ラスキン、ミレー、ロセッティ、エレン・テリー、ジョージ・マクドナルド、ヘンリー・ホリディ、アーサー・ヒューズ等々)が明らかになった。そればかりでなく、キャロルの撮った魅力的な写真(キャロルは最初期の最も優れたアマチュア写真家の一人でもあった)、日記の断片、キャロルが実際少女に出した手紙などが公表された。キャロルが書いた真面目な、また滑稽な、ユニークな手紙が公表された。少女友達に宛てた恋文のような手紙は人々の好奇の目を誘ったに違いない。

1876年7月21日付けのガートルード(Gertrude Chataway 1866-1951)に宛てて、先に行っていた避暑地から出した手紙の一部を以下に引用する。

MY DEAR GERTRUDE, — Explain to me how I am to enjoy Sandown



without *you*. How can I walk on the beach alone? How can I sit all alone on those wooden steps? So you see, as I shan't be able to do without you, you will have to come. ... <sup>17)</sup>

避暑地、ワイト島のサンダウンで知り合って、キャロルのお話を聞いたがった可愛い子供が忘れられなかったのだ。ガートルードの名前はのちに2重のアクロスティックに読み込まれ、キャロルの作品『スナーク狩り』(*The Hunting of the Snark*, 1876) の冒頭を飾ることになる。

女優のイサ (Isabella 'Isa' Bowman 1874-1959) 宛ての2万回のキスを送るという手紙、あなたの健康を飲み干すというような、紛らわしい表現の手紙などが続々と明るみに出て、キャロルの誇張した人物像がつくられ、まことしやかに言及されたこともあったが、確かに、キャロルの冗談を真に受けたらそんな風に勘ぐりたくなったかもしれない。例えば、キャロルは男の子には興味がなく、少女のみ偏愛した、というようにとられかねない以下のような文がそれである。1868年1月30日付けのマギー (Margaret 'Maggie' Cunynghame 1855-1931) 宛ての手紙の追伸の部分の言葉である。

P. S. My best love to yourself — to your Mother my kindest regards — to your small, fat, impertinent, ignorant brother my hatred. <sup>18)</sup>

その翌年出た『ルイス・キャロル ピクチャーブック』では、子供時代の家庭内回覧雑誌や、回覧用に発行した「パンフレット」類、論理学や数学関係のものや、キャロルが考案したさまざまなパズル、舞台上に上った『アリス』のこと、少女への手紙などが載っている。人々はまたまた想像もしていなかった多彩なキャロルを発見したばかりでなく、手記で読んで想像していた少女達への魅力的な手紙を実際に目にしたのである。

#### ・「手稿本」のオークション

次に人々をひきつけたのは、1928年4月3日の「手稿本」のオークションだった。

川遊びのボートの上で語った話をアリスのために清書し、自ら挿絵を添えてアリスにプレゼントしたこの本は、キャロルがアリスに依頼して借り

受け、復刻版を作り販売されたので、その存在は広く知られていた。そのオリジナル版を未亡人となったアリスが競売に出したのだ。ロンドンのサザビーズのオークションでアメリカのディーラー、ローゼンバックが競り落とした。15,400ポンドという児童書としては法外な値段だった。翌朝の新聞はこのことを大々的に報じた<sup>19)</sup>。アメリカに渡ったこの本は、やはり英国に戻すべきだという声が上がリ、人々の寄付で買い戻され、今はBritish Libraryの至宝の一つになっている。

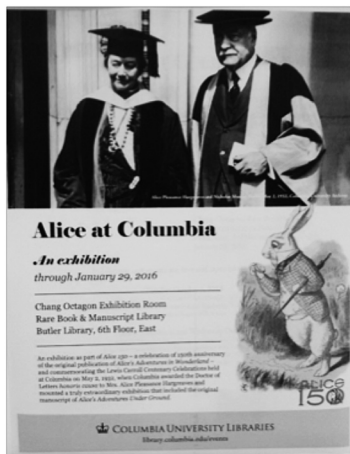
『アリス』本及び『アリス』関連の書物やアイテムのコレクターは世界に五万という。コレクターの存在の大きさは『アリス』の人気を支える大きな要因になっている。価値のあるいいものを作れば喜ぶコレクターがいるということは、採算が取れるということで、そこに投資の価値も生ずる。このサザビーズのオークションが『アリス』及びキャロル関係のアイテムの蒐集熱を加速させたのは確かだ。

『アリス』の世界を特徴づける一つは、コレクターの存在の大きさだと思う。一度だけロンドンのサザビーズのオークションに行ったことがある。海外につながっている何台もの電話に専属のオペレーターが張り付いて、会場の参加者と電話の向こうとの対決だった。ものすごい緊張感の中で落札されていくのを目の当たりにした。



## C. 大西洋の両側で文化を共有

### ・コロンビア大学での名誉博士号授与



1932年5月、アリスはキャロルの生誕100年を祝う式典に出席するために息子キャリル（Caryl）と妹のローダ（Rhoda）に付き添われて海を渡る。アリスは、夫のレジナルド・ハーグリーブズとの間に3人の息子をもうけたが、長男と次男を第一次世界大戦で亡くし、三男のキャリルだけが残っていた。

キャロルの生まれたのは1月だったが、高齢のアリスの健康を考えて式典

は極寒の1月を避け5月に行われたのだった。

アリスは5月3日に80歳の誕生日をアメリカで祝うことになる。不況に悩むアメリカ人が心を晴れさせようとするような話題はないかと探り当てたのが、アメリカにもいっばいいる『アリス』のファンを喜ばせるこの企画だったのだ。この出来事を題材に創られたのが、映画『ドリーム・チャイルド』（*Dreamchild*, 1985）だった。コロンビア大学で名誉博士号を授けられたアリスは、帰国して2年後の11月、82歳で亡くなった。

（図版は2015年コロンビア大学のパトラー・ライブラリーで催された特別展示のポスター）

### ・Walt Disneyのアリス

『アリス』にまつわるさらに画期的な出来事が二つある。一つはウォルト・ディズニー（Walt Disney Productions）による『不思議の国のアリス』の映画化である。75分のアニメーション映画 *Alice in Wonderland* は、1951

年に封切られた。映画は二つの『アリス』の話を混ぜている。これはより楽しいものにと願う演出家により舞台上でもごく初期のころから行われてきた。キャロル自身は反対だったが、キャロルが生前共にかかわって舞台に載せた演出家サヴィル・クラーク (Henry Savile Clarke 1841-93) によるオペレッタも二つの『アリス』が使われていた。この映画では複雑な場面は、ディズニー風にカットされ、奇想天外な出来事



の続出するストーリーにスピード感が加わって、子供たちをディズニーのワンダーランドに連れて行った。封切当初は高く評価されていなかったが、この映画の興行は異例のロングランを続け、ディズニー社に膨大な儲けをもたらした。

ジョン・テニエルの挿絵を踏襲したはっきりした色遣いの絵は視覚的に迫力のあるディズニー独特のアリスとキャラクターたちを作り出した。映画を受けて、ディズニー絵本がつくられた。A Big Golden Book, A Little Golden Bookである。その両方の判が版を重ねて、1951年の出版以来世界中に行きわたっている。

『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』の普及と人気を高めた要素としてアメリカで生まれたディズニー映画の功績は看過できない。

(図版は Walt Disney の *Alice in Wonderland A Little Golden Book*, Simon and Schuster, 1951 表紙)

#### ・マーティン・ガードナーの注釈本

もう一つの画期的な出来事は大人向けに書かれたマーティン・ガードナー (Martine Gardener 1914-2010) 氏の『注釈つきアリス』*The Annotated*

Alice<sup>20)</sup> の出版だった。1960年に出されたガードナーの注釈本は、英語圏でない人々にこの上ない恩恵を与えた。文中に多用されているナンセンス詩を読んでも、当時の人達が笑い転げたという面白さが理解できない。パロディの元の詩を知らないからである。ヴィクトリア朝の子供たちは、その詩の突飛もない展開を楽しんだ。大人たちも、子供の頃教会や学校で覚えこまされた退屈な教訓詩が愉快なパロディに置き換えられているのを読んで、そのユーモアに共鳴し心から笑ったのだ。パロディの元歌が分かっていても、残念ながら、外国人の我々にはその面白さは完全には伝わってこない。だが、知らないよりはどんなにいいかわからない。パロディ以外の作品中に散りばめられた言葉遊び、状況の説明などでも、外国人である日本の翻訳者たちがどれだけ恩恵を被っているかわからない。一例を上げてみたい。

『不思議の国のアリス』の2章で、アリスが、地下の国で自分が誰だかわからなくなった時、自分を試してみようと言うところがある。

「…私が前に知っていたことを試してみよう。ええと、4掛ける5は12, 4掛ける6は13, 4掛ける7は一ああ、大変！こんなんでは絶対に20までいけないわ！…」

もし、ガードナー氏の解説がなかったら、地下の国で感覚の狂ったアリスが馬鹿なおかしなことを言っているとしか理解できなかったに違いない。初期の翻訳者はそう訳すしかなかった。

ガードナー氏はこう解説している。

The simplest explanation of why Alice will never get to 20 is this: the multiplication table traditionally stops with the twelves, so if you continue this nonsense progression — 4 times 5 is 12, 4 times 6 is 13, 4 times 7 is 14, and so on — you end with 4 times 12 (the highest she can go) is 19 — just one short of 20.

A. L. Taylor, in his book *The White Knight*, advances an interesting but

more complicated theory. Four times 5 actually is 12 in a number system using a base of 18. Four times 6 is 13 in a system with a base of 21. If we continue this progression, always increasing the base by 3, our products keep increasing by one until we reach 20, where for the first time the scheme breaks down. Four times 13 is not 20 (in a number system with a base of 42), but “1” followed by whatever symbol is adopted for “10”.<sup>21)</sup>

掛け算表は伝統的に12までであるから、 $4 \times 5 = 12$ ,  $4 \times 6 = 13$ ,  $4 \times 7 = 14$  というように進んだら、 $4 \times 12 = 19$ で決して20にならないというのが一番簡単な説明であるが、と解説してから、ガードナー氏は、もう一つテイラー氏の本から一段進んだ説明を載せている。

18進法を使えば、 $4 \times 5 = 12$ が成り立つ。21進法なら、 $4 \times 6 = 13$ が、24進法なら $4 \times 7 = 14$ が成り立つ。こうして3ずつ増えていくと39進法ならば、 $4 \times 12 = 19$ が成り立つ。しかし、ここまでで破綻し、決して20になることはない、という説明である。

以前から数学者が何かありそうだと研究をしていたが、まとまって提示されたこの本の言葉遊びの解説、数学的、論理的な考察を通しての解説は、世の大人たちを納得させ、あっと言わせた。

もちろん、出版から100年近く経って、生活観が変わった英語圏の人々にも作品の背景にある文化を知るいい機会でもあった。人々はこの膨大な注釈に圧倒され、この作品の深さを見直した。博士論文のテーマに取り上げられるようにさえたのである。この本が出てからの翻訳者は、それ以前の人達が想像もできない程大きな恩恵を被っている。

30年後の、1990年には注釈書の続編、『続 注釈つきアリス』*More Annotated Alice*<sup>22)</sup>がニューヨークのランダムハウス社から出版された。今度はテニエルの挿絵ではなく、1900年初めのアメリカの絵本の黄金時代の担い手の一人ピーター・ニューウェル (Peter Newell 1862-1925) の挿絵が使われ、完全にアメリカからの発信になっている。

続編は『注釈つきアリス』を読んだ世界各国の何百人という読者からの情報に基づいたキャロル研究者のリサーチにより、さらに170項目もの新たな情報が取り入れられて、読み物としても楽しいものになっている。これでもまだ、新たな発見や読者からの指摘があり、2000年に3冊目の『注釈つきアリス 完結版』*The Annotated Alice The Definitive Edition*<sup>23)</sup>が発行された。

2011年ガードナー氏の死を悼んで編まれた『庭師に捧げる花束』(*A Bouquet for the Gardener Martin Gardener Remembered*)の冒頭で編者のMark Burstein氏は「万人が認めるだろう」と言いながら、こう言い切っている。

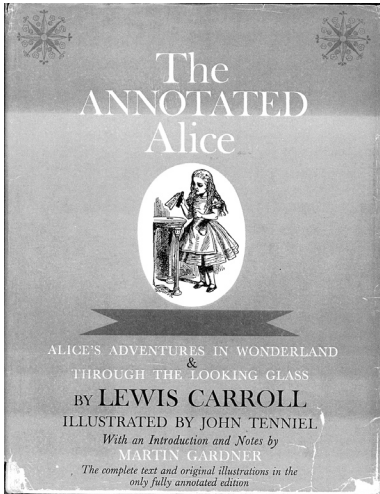
The most important edition of Carroll's masterworks after their initial issues of 1865/66 and 1871/72 was Martin Gardener's *The Annotated Alice* of 1960.<sup>24)</sup>

『続 注釈つきアリス』のカヴァーに、前作『注釈つきアリス』の功績が列挙されている。

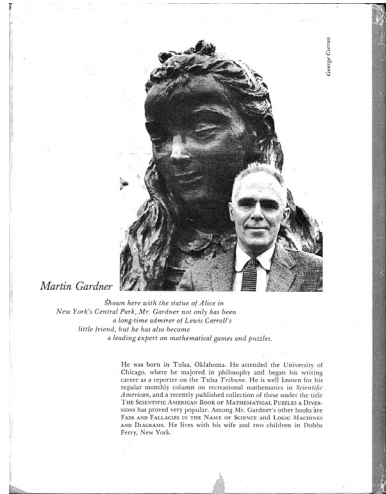
…Millions of readers have delighted in his clever annotations explaining the enchanting riddles, logic paradoxes, parodies, subtle humor, and concealed meanings in the books, and many of them have sent him suggestions for a sequel. …

…何百万という読者が、魅力的な謎々、論理的な隠喩、パロディ、軽妙なユーモア、二つの本に隠された意味などを説明している才気ある注釈に喜び、多くの人が思いつきを送ってよこし、続編の出版を望んだ…

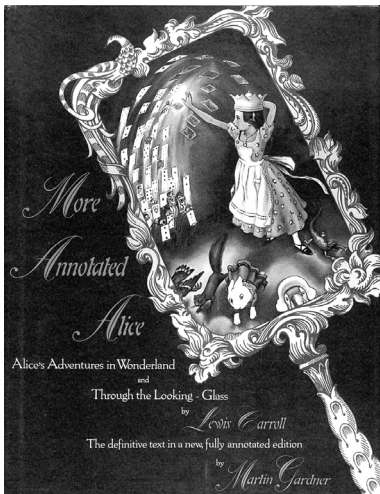




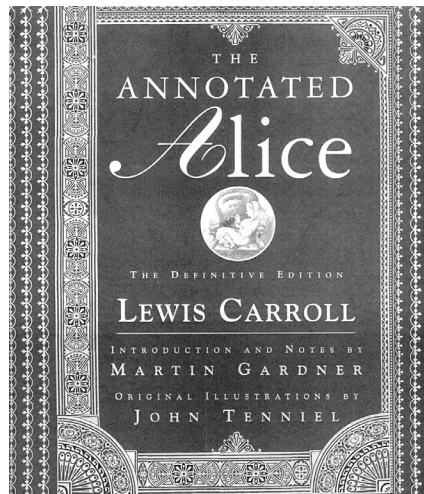
『注釈つきアリス』表紙



同書裏表紙N. Y. Central Parkのアリス像の前のMartin Gardner氏



『続 注釈つきアリス』表紙



『注釈つきアリス 完結編』表紙



## ・ルイス・キャロル協会の存在

次々と出版されていく『アリス』の本の需要と高い質を維持し、支え続けるのは、すでに述べたように世界に広がる『アリス』とキャロルの研究者、蒐集家、愛好家の存在が大きい。以下が世界の大きなルイス・キャロル協会とその構成メンバー数である。<sup>25)</sup>

イギリス：The Lewis Carroll Society 創立1969年 会員400名（うち200が国外）

The Lewis Carroll Society of Daresbury 創立1970年 会員約30名

アメリカ：The Lewis Carroll Society of North America 創立1974年 会員300名（うち約45が国外）

日本：The Lewis Carroll Society of Japan 創立1994年 会員130名（うち30が国外）

カナダ：The Lewis Carroll Society of Canada 創立1997年 会員24名

ブラジル：Sociedade Lewis Carroll Do Brasil 創立2009年 会員約60名

世界の文学者の Society でこれほど連携している例は他にはないだろう。イギリスの場合、半分が海外在住の会員である。複数の協会に所属している人も多い。

## 『不思議の国のアリス』の魅力

### A. 古典の要素

ここで『アリス』という作品の魅力を考えてみたい。さまざまな人がこの作品の魅力について語っているが、ここでは一昨年のニューヨークの「Alice 150」の大会で New York Institute of Technology (=NYIT) の3代

目の学長で北米ルイス・キャロル協会の創設メンバーの一人でもあるエドワード・グィリアーノ氏 (Dr. Edward Guiliano) の講演を元に紹介したい。今まで語られた児童文学としての枠を超え、文学として論じた説は実に斬新だった。ズバリと核心をつく説が展開された時、会場に一瞬ハッと息をのむような静寂が走った。グィリアーノ氏はヴィクトリア朝文学を研究する文学者でありながら、NYITを世界的レベルの大学に高めた功績者だというのが、作品を俯瞰するようなとらえ方には説得力があった。氏が説いた『アリス』という作品の価値と魅力は、要約すると次の二つになる。

### 1. language and character (言語の面白さと登場人物の魅力)

『不思議の国のアリス』は平易な英語で書かれているのに、言葉遊び、しゃれ、パロディ、論理的に一ひねり二ひねりもした会話、謎解きのようなアルファベット・ナンバーを使った言葉の使用などがふんだんに盛り込まれている。

外国語として読む日本人には、残念ながらその面白さを理解するのは難しいパロディを含めて、キャロルのスパイスの効いた平易で、かつ難解な英文は独特だ。

『鏡の国のアリス』の4章、双子の兄弟 Tweedledum と Tweedledee の次の会話を引くだけでその一端はわかってもらえるだろう。

“I know what you’re thinking about,” said Tweedledum; “but it isn’t so, nohow.”

“Contrariwise,” continued Tweedledee, “if it was so, it might be; and if it were so, it would be; but as it isn’t, it ain’t. That’s logic.”<sup>26)</sup>

また、アリスを理想の少女として描きながら、次々と登場するアリスを取り巻くキャラクターは実に個性的だ。明らかに人の世界の常識には合わない帽子屋、公爵夫人、料理女以外は、ナーサリィ・ライムや架空の動物

やトランプやチェスから抜け出したキャラクターたちである。Humpty Dumpty, Tweedledum & Tweedledee, Cheshire Cat, Dodo, the Caterpillar, the White Knight etc. そのユニークで雑多なキャラクターたちが、違和感なく言葉をしゃべり物語世界を構成している。この個性的な登場人物たちは妥協をしない。妥協を知らない人物や動物はひたすらわが道を貫いて生きている。そのオリジナリティは何にも変えられない。

## 2. essential plurality (必要なものを全て含んだ多様性)

『不思議の国のアリス』という作品には、王・女王を頂点とした階級社会が描かれている。頂点に立つ彼らの無能さ、自分の意に添わないといとも簡単に死刑を命じるハートの女王の残酷さ、一方、教養のなさが見え見えなのだが、格好をつけて自分たちより上の階級を装うグリフォンや偽ウミガメ、自分が誰だか全く分かってもらえない世界に紛れ込んで途方に暮れるアリス。判決が先、という不条理な裁判。そこには身分、階級、生、死、アイデンティティ、矛盾や不条理が描かれ、悲劇性、喜劇性、現代性、そういうもの全てが含まれていることが分かる。この世の生を生き抜くのに欠くことのできない、これだけはという必要なもの、全てが含まれている。

この1, 2, で上げた特徴は、シェイクスピアの作品にも、ディケンズの作品にも共通している。『アリス』には、この本が世に出た時には誰も考えてもいなかったが、時代を経て明らかになったのは、上記の作品に匹敵する古典の要素が備わっていることだと、グィリアーノ氏は強調したのだ。

子供の本の古典としての地位を獲得して久しい『アリス』だが、先に上げたガードナー氏の追悼号で、グィリアーノ氏が語っている『アリス』と「子供の本」という概念とのことを合わせ考えると『アリス』の立場がはっきりする。

… Still not much Carroll, but Martin Gardener was opening us the world of Carroll's *Alice* for us, in a sense showing us there is no such thing as Children's literature, as adults can take away meaningful insights and pleasures from what was reductively called "children's books."<sup>27)</sup>

「子供の本」と二義的に呼ばれるものから、大人が意味ある深い直感的理解と楽しみを引き出せるのだから、ある意味で子供の文学などというものはないのだということを示して、キャロルというよりはガードナー氏がキャロルの『アリス』の世界を我々に開いてくれているのだ。

アメリカで『アリス』に関するアカデミックな研究がなされ始めたのは、60年代半ばからであった。日本では、それよりやや遅れたが、70年代から研究が進み、今や児童文学を専攻する学生ばかりか、英文学専攻の学生にも、卒論ばかりか、博士論文のテーマとしても取り上げられない年はない。

## B. 作品に込められたメッセージ

こういう研究対象としての内容を含みながら、二つの『アリス』の子供の読物としての存在は揺るがない。幼児向けの絵本から、研究者向けの注釈書まで、どんな風に解体されても、物語の中に生きるアリスは健在である。

最後に、『不思議の国のアリス』という作品を通してキャロルが伝えたかったメッセージをアリスという少女の観点で私なりにまとめてみた。

### 1. 主役はあなた

どんな困難な状況でも自分で見極めてあなたの道を選びなさい。あらゆる感覚を働かせ、細心の注意を払い、危険を避けながら。

### 2. 人生は冒険

はらはらする冒険のない人生は退屈極まりないものです。勇気を出して

行動しなさい。楽しいことがいっぱい待っています。

### 3. あなたは大事な人

侮辱を受けたら怒っていいのです。自尊心は全ての人が生まれながらに持っている宝です。

### 4. あなたは人のために役立てる人

あなたが出来ることを、他の人にしてあげなさい。それは人間としてごく自然な、当然すべきことです。

出版以来150年を生き続けた『不思議の国のアリス』は、7年後に生まれた妹『鏡の国のアリス』と共に今後も世界中の人々に愛され続けていくであろう。英米のキャロル協会は早くも『鏡の国のアリス』の出版150年の anniversary を計画していると聞いた。

#### 注

- 1) 『アリス』という時は、明らかに文脈上『不思議の国のアリス』でない場合は、『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』両方を指すこととする。英語の *Alices* に相当する。
- 2) *'Alice' In a World of Wonderlands — The Translations of Lewis Carroll's Masterpiece*, 3 vols., by general editor, Jon Lindseth & technical editor, Alan Tannenbaum, Oak Knoll Press in corporation with The Lewis Carroll Society of North America, 2015
- 3) *Alice in Many Tongues: The Translations of "Alice in Wonderland"*, by Warren Weaver, The University of Wisconsin Press, Madison, 1964
- 4) 『翻訳の国のアリス』 楠本君恵, 未知谷, 2001
- 5) 翻訳された言語の総数は174言語 *'Alice' In a World of Wonderlands* Vol. 1, p.106
- 6) *Alice's Adventures in Wonderland*, by Lewis Carroll, Macmillan, 1885, p.106
- 7) 『愛ちゃんの夢物語』, 丸山英観訳, 内外出版協会, 1910 (明治43) 年, 116頁
- 8) *Alice in Many Tongues: The Translations of "Alice's in Wonderland"*, p.107
- 9) *'Alice' In a World of Wonderlands* Vol. 1, Appendix 3, *Alice: Languages Listed by Number of Editions*, p.743

- Appendix 7, *Through the Looking-Glass*: Languages Listed by Number of Editions p.749
- 10) ‘Alice’ *In a World of Wonderlands* Vol. 1,  
Appendix 1, *Alice*: Languages Listed by First Publication Date, p.733  
Appendix 5, *Through the Looking-Glass*: Languages Listed by First Publication Date, p.747
  - 11) ‘Alice’ *In a World of Wonderlands* Vol. 3, pp.552-3, p.558
  - 12) ‘Alice’ *In a World of Wonderlands* Vol. 1, p.752
  - 13) *ibid.* p.753
  - 14) *The Mystery of Lewis Carroll*, by Jenny Woolf, St. Martin’s Press, 2010
  - 15) *The Life and Letters of Lewis Carroll*, edited by Stuart Dodgson Collingwood, London: T. Fisher Unwin, 1898
  - 16) *Lewis Carroll Picture Book*, edited by Stuart Dodgson Collingwood, London: T. Fisher Unwin, 1899
  - 17) *The Life and Letters of Lewis Carroll*, p.383
  - 18) *ibid.* p.424
  - 19) 1928年4月4日付け The Daily Mirror 紙 図版はその紙面
  - 20) *The Annotated Alice Alice’s Adventures in Wonderland & Through the Looking-Glass* by Lewis Carroll Illustrated by John Tenniel With an Introduction and Notes by Martin Gardener, Book Craftsmen Associates, Inc., 1960
  - 21) *The Annotated Alice*, p.38 n.3.
  - 22) *More Annotated Alice Alice’s Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass* by Lewis Carroll Illustrations by Peter Newell With Notes by Martin Gardener, Random House, New York, 1990
  - 23) *The Annotated Alice The Definitive Edition, Alice’s Adventures in Wonderland & Through the Looking-Glass* by Lewis Carroll Original Illustrations by John Tenniel Introduction and Notes by Martin Gardener, W.W. Norton & Company, Inc., 2000
  - 24) *A Bouquet for the Gardener Martin Gardener Remembered*, edited by Mark Burstein, The Lewis Carroll Society of North America, 2011, p. xii
  - 25) ‘Alice’ *In a World of Wonderlands* Vol. 1, pp. 826-827
  - 26) *Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, by Lewis Carroll, Macmillan, 1932, p.68
  - 27) *A Bouquet for the Gardener*, p.18

### その他の主な参考文献

*Lewis Carroll Diaries*, 10 vols., edited by Edward Wakeling, London: The Lewis Carroll Society, 1993-2009

*The Letters of Lewis Carroll*, 2 vols., edited by Morton N. Cohen, London: Macmillan, 1979

### 写真出典

(a) *The Photographs of Lewis Carroll A Catalogue Raisonné*, edited by Edward Wakeling, University of Texas Press, 2015, p.110

(b) *ibid.* p.247

*Alice's Adventures in Wonderland:*  
A Book Adults can Gain Meaningful Insights from

Kimie KUSUMOTO

《Abstract》

2015 was the 150<sup>th</sup> anniversary of the publication of *Alice*, 1865. It is very rare for a single children's book to be commemorated, but the book deserves to be honored in this way. Together with the sequel, *Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, it is the most loved children's book in the world; the most translated, the most performed on the stage and the most adapted for ornaments, fashion and character goods. Why have the books attracted both children and adults over so many years without losing their attractiveness?

*Alices'* popularity was supported by a huge group of collectors all over the world, and Lewis Carroll Societies coordinate well. While Disney's *Alice* attracts children, with the publication of Martin Gardener's *Annotated Alice* (1960), Carroll's two *Alice* books have become favorite subjects for doctoral theses for students majoring in Language or English Literature.

Edward Guiliano, from whom I picked a phrase for the title of this English abstract, concluded in his talk at "Alice 150" in New York that the books have the same elements as other world classics like Shakespeare's and Dickens's masterpieces, namely 'language and characters' and 'essential plurality.'